



十二月



平成23年12月発行 第10号

白金蔭月例句会案内

一月二十日(金) 12:00～15:00 (アビスタ第五学習室) 兼

題: 新年一般 新年会 17:00～19:00 (備前にて)

二月十七日(金) 12:00～15:00 (アビスタ第一和室)

兼題: 建国記念日、公魚

三月十六日 12:00～15:00 (アビスタ第五学習室)

兼題: 蜥蜴出づ、牡丹の芽

新年一般の参考句 (一月二十日分)

遠方に富士くつきりと恵方道

乱れし国の修正液ほどお降りす

鏡餅産湯を使ふこと丸め

俳句など書いてつまらぬ賀状来る

へんぽんと舞へぬ日の丸大旦

元旦や暗き空より風が吹く

砂時計音なく落ちる元旦に

あらたまの鍋持ち上げる力かな

人間でいたら来た来たお正月

女坂箱根駅伝男坂

初日いま檜田核爆発あるな

大初日一人ひとりが受けて佇つ

高橋和子

瀧美千江

志村宣子

後藤章

高橋淳二

青木月斗

吉田十二

中村堯子

久保内美清流

久遠順

三橋敏雄

磯野莞人

月例句会報 (11/12/16 9名 欠投句五名)

飯田孝三

煤逃げのぼったり隣る 齧付 かぶりつき

そめがみ

ゴンドラを唄ふ 染髪十二月

数へ日の飽パン一つ余計に買ふ

積読の壁のいつまで古暦

風呂吹やうかぶ山河の佇ひ

増田陽一

風呂吹や月蝕既に進みをり

菱食の便りもありて古暦

蝕の月赫くオリオン織かりし

優先席マスクの白く浮びをり

雪降り「憂鬱の魚」頭を揃へ

増田悦子

マチュピチュの写真残して古暦

風呂吹や窓の曇りも温かし

古暦今年よき事何と何

葱買ひて優先席も空いてをり

古暦予定書き込み少し減り

風呂吹やヒッグスしゃつくりNHK

宿坊の風呂吹大根大きかり

月蝕を冬の一等星囲む

枯蓮の淵のさざなみモアレ出づ

皆既月食明けて初霜下総は

陸前はあの日のままの古暦

湯の宿の風呂吹海老の色添へて

二度三度百会に止まる冬の蠅

聖護院なる風呂吹を大皿に

冬の暮塔婆傾ぐや寺領塀

光成高志

独り居の偽り残る古暦

朝ぼらけ沼地這ひたる霜の声

核家族書込み多き古暦

冷めてから風呂吹つく飲んだくれ

窪田空華

風呂吹の熱々なるを吹いて食ふ

数へ日や明日待たるるわらべうた

をみならの黒き靴下降誕祭

いつまでも刺さる棘あり開戦日

古暦いまだ明日を残したる

光みち

杉浦弥栄子

風の日は酒と風呂吹猫友に

古暦風に吹かれて所在なし

ぺん持ちて書くもの忘る年の瀬や

小春日の里は静かに鐘響く

冬陽浴び桜老木鮮化粧

黒田彰一

古曆老子の言へる 芻狗^{すうく}なり

柿よりは米に群がる雀らは

年末のクラフト今年もできそこない

ふとん干す上にかまきり日向ぼこ

雨戸開け八ツ手の黄葉と寒椿

無残やな土間に三日の古曆

風呂吹や味噌は二種類皿の中

つまずいて後振り向く厄落し

二三里を来てみて蓮の料理かな

穴熊の一手女房の居る炬燵

嫁入りの鏡台に艶十二月

大寺に手足冷えをり間引絵馬

小山陽也

吊されて塩鮭乾ぶ越の国

里踊りしまひて帰る冬の橋

加賀干菓子炬燵に食めり女客

風呂吹や少し暗めの厨の灯

喪の家の裏口を問ふ柚子たわわ

冬の河一氣に渡る大鳥

味噌汁を少し濃い目に師走かな

その中に兄の死のあり古曆

青木啓泰

風呂吹やお国訛りの母のゐて

ひと月は残しておきぬ古曆

冬晴れの休刊日孫誕生す

肉野菜揚げ物煮物毛糸編む

おうどんの出汁は秘伝の里神楽

倉田紀子

冬空に皇帝ダリヤの仁王立ち

吉羽多美子

しろみそら

田中静世

金色に又銀色にすゝき原

綿の美のはじけてあふれ真白かな
葛枯れてあらはになりし畑の道

蒲の穂の風を待たずにほどけゆく

選句結果（数字は入選数）

- 6 陸前はあの日そのままの古暦
- 5 穴熊の一手女房の居る炬燵
- 4 その中に兄の死のあり古暦
- 3 風呂吹や少し暗めの厨の灯
- 3 嫁入りの鏡台に艶十二月
- 3 蝕の月赫くオリオン織かりし
- 2 風呂吹やお国訛りの母のゐて
- 2 マチュピチュの写真残して古暦
- 2 雪降れり「憂鬱の魚頭を揃へ
- 2 葛枯れてあらはになりし畑の道
- 2 宿坊の風呂吹大根大きかり
- 2 古暦いまだ明日を残したる
- 2 蒲の穂の風を待たずにほどけゆく
- 2 大寺に手足冷えをり間引絵馬
- 2 喪の家の裏口を問ふ柚子たわわ

みち

啓泰

多美子

〃

紀子

陽一

そら

悦子

陽一

静世

高志

空華

静世

紀子

多美子

2 菱食の便りもありて古暦

2 核家族書込み多き古暦

2 繰り返し百会に止まる冬の蠅

2 小春日の里は静かに鐘響く

2 味噌汁を少し濃い目に師走かな

2 優先席マスクの白く浮びをり

2 無残やな土間に三日の古暦

2 積読の壁のいつまで古暦

1 風呂吹きやうかぶ山河の佇ひ

1 枯蓮の淵にさぐなみモアレ出づ

1 風の日酒と風呂吹猫友に

1 里踊りしまひて帰る冬の橋

1 肉野菜揚げ物煮物毛糸編む

1 二三里を来てみて蓮の料理かな

1 数へ日や明日待たるるわらべうた

1 数へ日の餡パン二つ余計に買ふ

1 をみならの黒き靴下降誕祭

1 吊るされて塩鯢乾ぶ越の国

1 ゴンドラを唄ふ酔狂十二月

1 朝ぼらけ沼地這ひたる霜の声

1 いつまでも刺さる棘あり開戦日

1 風呂吹やヒッグスしやつくりNHK

陽一

彰一

敏子

弥栄子

多美子

陽一

啓泰

孝三

〃

高志

弥栄子

紀子

そら

啓泰

空華

孝三

空華

紀子

孝三

彰一

空華

高志

1 ふとん干す上にかまきり日向ぼし

1 煤逃げのぼつたり隣る齧付

1 皆既月食明けて初霜下総は

1 風呂吹や月食既に進みをり

冬の暮塔婆傾ぐや寺領堀

独り居の偽り残る古暦

風呂吹や窓の曇りも温かし

風呂吹や味噌は二種類皿の中

ひと月は残しておきぬ古暦

雨戸開け八つ手の黄葉と寒椿

ペン持ちて書くもの忘する年の瀬や

つまずいて後振り向く厄落し

古暦今年トキ事何と何

湯の宿の風呂吹海老の色添て

冬晴れの休刊日孫誕生

冬空に皇帝ダリヤの仁王立ち

葱買ひて優先席も空いてをり

加賀千菓子炬燵に食めり女客

古暦予定書込み少し減り

柿よりは米に群がる雀らは

冬陽浴び桜老木鮮化粧

おうどんの出汁は秘伝の里神楽

陽也

孝三

みち

陽一

彰一

〃

紀子

啓泰

そら

陽也

弥栄子

啓泰

悦子

みち

そら

静世

悦子

紀子

高志

陽也

弥栄子

そら

冷めてから風呂吹つく飲んだくれ

風呂吹の熱々なるを吹いて食ふ

綿の実のはじけてあふれ真白かな

古暦老子の言へる芻狗なり

金色に又銀色にすゝき原

聖護院なる風呂吹を大皿に

年末のクラフト今年もできそこない

月蝕を冬の一等星囲む

彰一

空華

静世

陽也

静世

みち

陽也

高志

一句一句鑑賞（9号分）

レモン搾れば秋の蚊がまだ飛べり

飯田孝三

悦子

レモンを搾ったら、あら、秋の蚊がとんで来た。もういないと思つたのに、レモンの鮮烈な香りに活気づいたのだ。

「搾れば、」「飛べり」の呼応が小気味よく、一句のリズムを弾ませる。加えて、上中の頭脚韻を含む六a母音の繰り返しがそれを際出立させる。さらに、四濁音が蚊の翅音さえ運ぶ。「搾れば」は瞬間の感知。日頃は煩わしい、蚊の生氣回復をいとおしむようだ。身近な些細を

平易に詠んで奥が深い。それは他の二句についても言える。

冬日さす一人遍路は靴を履き

弥栄子

お遍路さんは、今も草履履きかな、それともスニーカー？靴履きはあるまい。ところがこの句の主は靴履き。きつと普通の革靴だ。なんとも奇妙。そこが句の“さわり”である。二人連れなどもあるだろうが、一人遍路である。遅参の秋遍路だろう。「冬日さす」が意味深長。先頃退場した、宰相役になぞらえるのも一興だが、その場合、中七は「遍路一人」もある。

酉の市仲見世早く店を閉め

陽也

筑波エキスプレスが開通してから、浅草の人出が大分戻った感じがする。以前は、大通りの店も軒並み6時頃には閉めていた筈だ。仲見世の店仕舞いはとくに早かった。この頃ではそんなことはない。それにしては今日の仲見世は早仕舞いだな。そりやそうだ、今日はお酉さま、そちらに総出である。下町が賑わうのはいい、殊に浅草が。江戸文化の名残がある。来年五月にはすぐ川越しにスカイツリーもオープンする。

故郷の東京にみる鰯雲

多美子

秋の雲、とくに鰯雲は郷愁を誘う。最近知ったのだが、「望雲」という言葉がある。「雲を望み見る」、「子が他郷

で故郷の親を恋慕うこと」(大終館『新漢和辞典』)つまり望郷の同義。東京に生れ、育てば故郷は東京。望雲の情とは無縁か。鰯雲のかなたに何を見ればいいのか。ふと思ひ出した、子供たちが小学生の頃、友達が毎年夏休みに親の田舎に泊りに行くのを羨ましがったのを。私ども夫婦の故郷も東京とその近郊です。

冬の雨色とりどりの合羽の子

敦子

冬の雨とカラフルな合羽の取合せが奏功。最近聞かなくなった「合羽」が決まる。アメリカツパの三a母音が不思議に響き合い、彩りが一段と映える。レインコートでは句にならぬ。また「とりどりの」がいい。子供たちの動きが目に見えるのだ。仮に「さまざまの」、「いろいろの」ではレポート、句が萎む。明るい冬の雨の光景が楽しい。

新海苔や高架がぶさる日本橋

孝三

新海苔と日本橋との取り合わせは、まるで広重の浮世絵をみているような江戸情緒だけれど、ここに高速道路が被さっている。これは悪しきバブル経済の遺物であり、最近それを復元しようという声も聞く。「かぶさる」の措辞が秀逸で、一語であのちぐはぐな暗い

景が見えてきて、ひとつの文明批評のようである。

藩校の床に軋みや鴉高音

紀子

この藩校は、鶴岡市の致道館と聞いた。城下町に残った古建築の廊下が軋む。鴉の声も最近聞かなくなつたけれど、ここではよく徹りそうである。鴉高音はまるで過ぎし日の厳格な師の声か、また声高な子弟の声か、緊張感のあつた教場の残響の如くである。周到的な材料による密度のある句である。

秋蝶の低く翔びたる磯回かな

羊三

磯回いそみは磯に沿つて行き巡ること。また、海辺の入り込んだところ、と辞書にある。ここでは磯をある手いて、秋蝶が低く飛ぶのを見た、ということのようである。磯の波すれすれに飛ぶ蝶は危うい美しさで、海の色との対照で斑紋が鮮やかに見えてくるようだ。何蝶であろう。

原っぱを花野と思い立ち止る

啓泰

花野の季語で連想するのは、高原で桔梗や女郎花や松虫草などの咲き乱れる、日常から離れた場面を連想するけれど、作者は身近の空地に草の茂つて居るのを美しいと感じて、しばし見とれたのである。「美は到る所にある。しかしそれを発見するには詩人の目を必要とする。」とか、詩人であつた J. H. ファーブルも言つて居たよ

うである。

一句一句鑑賞(十号分)

風呂吹やヒッグスしゃっくりNHK

黒田彰一
高志

風呂吹を食つていたところ、しゃっくりが出て止まらない。そこNHKが「ヒッグス」のニュースを突然流したので、驚いた作者のしゃっくりは急に止まつた。

ヒッグス粒子は質量の起源と云われ、来年にもその存在が確認されれば、素粒子物理や宇宙物理に新展開を呼び起こすとか。物理学上の「大予言」とされ、実証さればノーベル賞級らしい。風呂吹より以前から存在していたことになる。「風呂吹」と「ヒッグス」と云う全然別世界の物質の対比の妙。お固いNHKが下5に落ち着いて居座つて決まつた。

風呂吹や月蝕既に進みをり

飯田孝三
陽一

昔は風呂吹を凍える手に吹きふきいただいた。人の情が、殊更、はらからの情が身に入みる。さて掲句、湯気と息とが立ちこめる。有機の坩堝の生吹きが無機の果て、月世界に飛揚する。双眼鏡の筒中で地と空とが相響く(作者は双眼鏡で月食を窺く)。さわりは「進みをり」。例

えば「始まりぬ」と比べれば自明、月食の興味に止まる。掲句は、地の悲喜交々の人間劇と、刻々渉る月食の時空を抱える。「既に」に胸懷の深さ。「をり」はその諾い。「風呂吹」は大凡の類句類想を容れぬ一句である。

嫁入りの鏡台に艶十二月

紀子

今世紀結婚事情の変り様は甚だしい。その象徴に嫁入り仕度がある。大体、「嫁入り」なんていわない。嫁入りは昔、女性一生の大事だった今も？。異論の向きはそれはそれ。さて、十二月、その年、いや越し方をふり返る。両親思い入れの三面鏡を開いてふつと思う。新婚の日々のあれこれか、はたまた、なにを。鏡の艶は今の変わらない。十七音の真ん中、「に」が妙。臍である。仮に「の」なら、リズムは撓らず艶が曇る。艶こめるところ文化が栄える。

皆既月食明けて初霜下総は

みち

一句を背負つて立つ「は」がぴたと決まる。大技を揮つた鉄棒の着地が成るごとく。それを 齎すのは「皆既月食」

の漢字列の象とその七音のひびき、それに直後半拍（そう読む）の呼吸だ。大回転頂上の刹那である。因みに「月食」のなら、気がぬける。さて「は」の心、この地に来て二十年（？）になる、下総への愛着と重ね来た日々への感慨を見てとる。晴れば、筑波富士が見える。月食の暗みと

霜のきらめきが響き合い、「初霜」の気韻がこれを際立てる。上中のk、i音、中下のs、a音が印象的だ。くハツシモシモオサハの踏韻が身に入る。

をみならの黒き靴下降誕祭

空華

「黒き靴下」といえば女学生のもので。女子学生ではない。昭和の女学生だ。「をみなら」が雅。慎ましく、凛と矜持ある所作を思う。靴下は無論ストッキング。「降誕祭」は神への献辞。をみならは異土の神にも敬虔の念を失わなかったのだ。聖歌の斉唱が聞えてくる。小磯良平描く絵を連想した。さあ、黒靴下だったかどうか。ところでサンタの小父さんの贈物も「靴下」の中。こちらはソックス。近頃は抱えきれないほどだから、よい子たちは、はて、信じるかな。（右は、昭和は餓鬼の掲句鑑賞。因みに二桁生まれの連れ合いに訊いたら、生徒会で衆議一決、黒ストッキング廃止、以後ホワイトソックス。野球の話ではありません。）

古暦風に吹かれて所在なし

彌榮子

光成高志

本来は、年が改まつてのち、前年の暦を古暦というのだが、十二月もおしつまつて新しい暦がくると、使用中のものは古暦という感じがする。暦には、日暦といって毎日は何のや、ひと月ごとにはぐ月暦、一年の七曜表が一枚に

刷り込んであるものなど色々ある。掲句は、月曆であらう。あと一枚になった十二月の数へ日の一日の室内の一齣とみる。窓の開けられた部屋に掛かった月曆が所在無く風に吹かれている。時折、捲れて壁に擦れ音をたてたりする。もう、新曆が後ろに掛けられているかもしれない。もう直ぐ、お払い箱の古曆を見れば、すずろにものあはれなりという感慨が湧いてくる。

ハガキ句管見(第十報)

飯田孝三

歌留多読む声の訛を正されて

高志

和氣藹々、カルタに興する一家団欒の情景が彷彿する。下五に描く「訛を正されて」が手柄。読み手、取り手の弾む声が聞こえる。訛を正すのは子供たちで、正されるのは、年配の主だろうか。めでたい正月の風景である。ほれぼれと、はれやかな気分になる。しかも、奥が深い。それは、とりわけ、「訛」の語のもつ “ ふくらみ “ からくるのだらう。用字に、リズムに、巧まず、配意がいきとどく。「く読む」で軽く切り、一気に読み上げたい。座五はすぐ上五にたち返り、歌留多はいよいよ賑やかにつづく。「くされて」の弾みと、「訛」の “ ふくらみ ” の温みを見逃せない。正月の「めでたさ」の意味合いを改めて考え

ハガキ句第十報(06・1月)

石積や一条冬の鳶紅葉

プリンセスミチコ 輪冬の薔薇

秋深し人肌と云ふ甘きもの

遠富士のうしろに落ちし冬日かな

みどり児の双手が冬日握りけり

犬吠の風やはらかに四温晴

読初和泉式部日記ひらく

神の地球万経帰一淑氣満つ

髭うれし黄門様と飾り海老

初景色三間先に潜く鶴も

年を経て米寿の初日島に見る

人間でいたら来た来たお正月

歌留多読む声の訛りを正されて

獅子舞の太鼓に暴れ笛に寝ぬ

孝三

妙子

湖秋

たか子

哲男

和弘

司

虎童子

ひろし

園子

美清流

高志

敏子

させられる。17.音の語順を変えただけで、この韻文がこんなに豊かな伝達性、起想性をもつ。俳句は何と奥深い文芸なんだろう。

獅子舞の太鼓に暴れ笛に寝ぬ

敏子

幼い頃、目に刻んだ獅子舞の光景が蘇る。その所作、挙動の始終がありありと見える。観察が確か、表現に隙がない。「暴れ寝ぬ」の連用、終止の重ねに、舞いが躍動し、「寝ぬ」の余韻が伝統の民俗文化のふくらかな記憶を揺り覚ます。仮に、「寝ぬ」だったなら、只、囁目吟でそれきり。結「寝ぬ(いぬ)」の文語表現が“いのち”である。

「いぬ」の音色は民族の“こころ”“だうろ”。“暴れ

おんしやく

で半拍おき、読みたい。ぼくの田舎では、毎年、松の内に獅子舞が各戸にやつてき、座敷で舞った。恐ろしげな獅子頭を掲げ太鼓と笛に合わせて踊る姿は、猛々しく、又、愛嬌あふれる。大抵の幼子は、厄除けの“頭噛み”の仕種に泣きだす。なんといつても、圧巻は、足元に蹲り、両耳を伏せて這いつくばる姿態だ。いじらしく、ユーモラスである。その頃、村の舞い、笛の名手は、誰々の父ちゃんだ。偶々、実家で獅子舞に見えた時は、どれも幼友達だった。もう、四〇年も前になる。母も兄夫婦も健在だった。

人間でいたら来た来たお正月

美清流

解脱。大人の風も。作者の面目躍如。「人間でいたら」が臍。懐深く、難解。そこに、「来た来た」の囃し言葉を配し、

「お正月」と、軽妙に切りあげる、自在の呼吸が心憎い。

仮名づかいも現代表記で一貫させ行き届いている。臍のほぐし方によって、面白みも、渋みも。「まあ、そこはかやつているうちに、又々、正月だ。」やや、斜に引いた、自足、自笑、年輪の句である。一茶の一句に通底するか。

哲男

犬吠の風やわらかに四温晴
波と風の犬吠にもこんな日和があるのだ。「やわらかに」の修辭が生きている。四温晴に開く心が伝わる。

初景色三間先に潜く鶴も

ひろし

初景色の広がり目に目の前の鶴を配したところがミソ。気負いのない、正月、めでたさの句。

読初和泉式部日記ひらく

和弘

座「ひらく」が利き、正月のめでたさを伝える。ただ、ぼくの不勉強のせいで、「和泉式部日記」との配合が、はたと響かない。

神の地球万経帰一淑氣満つ

司

淑氣ひたすらの一句。「帰一」に滲む一途さが、“いのち”“だうろ”。

年を経て米寿の初日島に見る

園子

措辞あげてめでたい。でも、削ぎ方があるのではないか。

遠富士のうしろに落ちし冬日かな

湖秋

同じく、削ぎようがあるだろう。

お便り広場（到着順、敬称略）

前略 彩基金戴きました。ご芳志誠にありがとうございます。今年は十月と十一月の二回赤沢に吟行会と「俳句と写真」の会で行ってきました。今年は写真のように、紅葉は全く駄目でした。小生も今は甲状腺癌治療の為、中伊豆のラジウム温泉に毎週通っており、今のところ小康状態なのでこの調子でゆけばと思っております。今年も早いもので後ひと月になりました。お体を大切に、ご健吟ください。簡単ながら御礼まで。草々

禍つ年櫓もみぢの焦茶色

ひろし

（H. 23・11・27 平野ひろし）

白金葭十一月号拝受致しました。毎回その充実振りに圧倒されています。石巻はかつて杭をやめて平等に沈下するように平面計画を含めて設計した百貨店を見に行かれたのですか？放射能の測定は中国製はバラツキが大きいとて、地震の大きさも日本は気象庁震度階を使用したため、十三日にM9.0、アメリカUSGSは十一日夕M7.9二十時にはM9.0.いろいろありますね。益々の御活躍を祈ります。（平 23・11・28 小山陽也）

青木啓泰さんには駄文「文化と風土」をお読みいただき有難うございます。『阿部青鞋集』他を刊行（昭和四十一年）、青鞋を中央俳壇に登場させたとき、津久井理一氏と昵懇であられたとは耳よりな奇縁です。「ねむれずに象のしわなど考える」は『ひとつるまた』（同五八年刊）所収、「俳句に憑かれた人たち」松林尚志著 沖積舎刊）から引用しました。選句に力を入れていくつもりですが、時々、見落とします。十一月句会の「梢わたる風は標に冬に入る（空華）もその一つ。「白秋の色なき風」に対して、梢をわたる藍色の風が渡つて冬が来た」との鑑賞（高志）に感心しました。秋から冬に入る気韻に敏感に応じた作者と評者に敬意を表します。

（H. 23・12・02 飯田孝三）

おはようございます。先日は白金葭十一月号をお届けくださりありがとうございました。お礼が遅くなりごめんなさい。昨夜多美子さんから電話があり新年会の二次会のおさそひをいただきました。楽しみにしていますので、宜しく願っています。

手の内に竜の玉あり誕生日の拙句ですが、活字にしていたきましたら、龍の方が良かったかも。句を音にして読むことは同様大切なことと気づかせていただきました。ありがとうございました。

光 みち様 倉田紀子(H. 23. 12. 4)

「白金葎」第9号いただき有難うございました。早くできましたね。一句鑑賞文、書きかけて居ましたが、遅くなりました。一應お送り致しますので、使えたら使ってください。毎年春の団体展に出す版画が来年は事情があつて一月早く仕上げねばならず、正月にかけて作業するつもりで、ネンガジヨウなどと共にもたもたしております。それではまた。(H. 23. 12. 3 陽一拝)

寒い日が続きます。皆様如何にお過ごしですか? 会費千円同封、古代は別便にて、相変わらずの駄句。

だん 乱筆になりました。この前は東京駅で

迷子になりました。ここまでで便箋二枚失敗、三枚目です。その私が俗事中の俗事伯母さんの多人数の分割協議所をつくつています。来年二月頃にはおはる? この前神田の古本屋で単行本三冊文庫三冊で計九百円でした。ですから本はたまりますね。皆様の益々の御活躍を祈ります。小山陽也拜(H. 23. 12. 12)

いつも白金葎をお送り下さりありがとうございます。貴兄のおすすりめもあり、小文をお送ります。お役にたてば幸いです。よろしくお願いします。

(H. 23. 11. 24 伊藤一舛人
前略お誘いの一月二十日の新年会当日、水戸にて梅原

昭男氏のある受賞記念祝賀会があり、既に予約済みで、参加できません。あしからず。それから、うっかりしておりましたが、月々の会費誌代正式においくらからお知らせ下さい。うっかりしておりました。よろしくおねがい致します。(H. 23. 12. 14 青木啓泰)

先日はお陰さまで楽しかった。いつもお手数を煩わして恐縮です。又、丹精された黒豆と銀杏をいただきました。有難うございます。

ぬばたまの黒豆銀の銀杏の包

いよいよ押し詰まり、寒さも募ります。ご夫妻とも御体を大切に、ご健吟ください。今年もいろいろお世話になりました。来年もよろしくお願いいたします。よい年を迎えられますように祈りあげます。

(H. 23. 12. 19 飯田孝三)

受贈誌(12月号)

時の日の弔笛定時柗車発つ(H. 23 冬号) 駿河岳水
土浦の蔵町灼けて予科練展(〃) 〃

立冬の声よく通る谷戸の径(あすか通巻44) 野木桃花
線量を測る側溝木槿垣 (〃) 長谷川嘉代子

蚊帳吊りて昔を今に閉じ込める(〃) 脇本公子

黒松の屈曲くぐり西行忌(白浪2011刊) 成井恵子
七草やチャイナタウンで粥が出る(〃) 青木啓泰

白樺の梢積上げて山暮らし(薊86号)

森下流子

峽の村同じ構へ雪囲ひ(一)

〃

鵬の贅伸ばし切つたる後肢(彩102号)

平野ひろし

深雪晴富士樹林帯銀沙灘(一)

〃

出水跡芥鏝ひて藜立つ(二)

平山三郎

柿を剥く皿にこりと種の音(二)

上田とし枝

名句散策(一)―その三―

反 三 圃

あなたなる夜雨の葛のあなたかな

不器男

不器男は、掲句が『ボトトギス』誌初掲、弱冠二十三歳いきなり巻頭(大正十四年十二月号)である。四S始め、錚々たるたる門徒らを退けてだ。「選句は創作なり」と説いた、虚子ならではの慧眼であり、育英ぶりである。なにしろ投句の常連が年に一度か二度ボトトギス雑詠欄に載るのが大変だった時代である。彼の凜質がことさら際立つたのだろう。

虚子以外の現代俳人とその主要作品を知ったのは、昭和二十年代後半に新刊された角川新書の山本健吉著『現代俳句』においてだった。不器男もその一人。掲句には、虚子の「名鑑賞」とともに強い印象を受け、一種、青年のアンニュイ(倦怠)を感じたのを覚えてる。平成に入る頃、再び俳句を初め、俳誌、新聞文芸欄などで同音に

旅の「望郷」句と評されるのを知り、納得いかなかった。約四十年を経、かつて感じた漫ろの「アンニュイ」とも違う、遣る瀬ない「憂悶」の情を見ていたのである。既述、夕刊記事が発端で、不器男に関する二三の著述に触れ、わが意を諾う思いがした。幼児父を亡くし、学業や将来進路など身辺事情に悩んでいたのだ。「機窓や打たるゝ蝶のはためき来」(不器男)に彼の煩悶のすがたを見る思いがする。「望郷」は、実は、そんな末子不器男を何かと気遣う老母を思いやる心だったのである。不器男句は的確な描写と万葉ふりで知られる。的確描写については、先に高志さんが代表句「白藤やゝ」、「麦車」を持って紹介された。万葉調は、秋桜子らに先駆け、不器男が俳句に採り入れたという。掲句のおおどかな韻きままことに宜なるかな。

ところで、葛に関わる母子、男女など人の情愛をめぐる古歌、説話は少なくない。万葉その他の古典に親昵した不器男である。帰仙の道すがら、車窓に夜雨に打たれる葛を見るにつけ家郷の老母をことさら思いやったことだろう。単なる囁目の叙景句ではない。「私の気持ちとは違ひ」、「ダブルイメージである」と述べた彼の胸中が見える。「不器男は目に見える外界の風物を自分の内面の

映像としてとらえなおそうとした」(飴山實「芝不器男とその俳句」。「情懷の写生」といわれる所以である。

(註) 飴山實編「芝不器男句集 麦車」扉裏所掲の短冊句。
機窓や打たるゝ蝶のはためき来

不器男 (平23・12・09)

お詫び 先月号の名句散策(二)の文中、中ほど、「そもそも、「の次に、「不器男を旅人になぞらえるのは無理である。件の夕刊記事がきつかけで、「を脱落させました。お詫びして、挿入をお願いします。

十一月の俳句カレンダー 伊藤一艸人

俳句をやっている知人から毎年俳人協会の俳句カレンダーを送ってきて下さる。居間に掛けて楽しみながら重宝しているが、十一月は次の二句の短冊である。

余生とは二人三脚花ハツ手

水原春郎

集へるは俳のバツカス神の留守

辻田克己

二句ともやゝ身につまされる句で、秋桜子の「子息もはや余生を詠むお年になられたのかと思つて調べてみると、春郎氏は大正十一年のお生まれ、私より四歳年長で私の認識不足で、とうに米寿もこえられて余生もいいところ。正に余生を大切にされて、俳句のため、又、馬酔木誌のため一層のご活躍をと、認識を改めた次第であつ

た。二句目の「俳のバツカス」の句にはいたく感じ入った。私もだらしなないバツカスで、句会のあとの呑み会は何時もうすんで顔を出しているし、お誘いが無い時は自宅のある駅近くのカウンターでジョッキを傾けて帰る。作者の克己氏もきつと神の留守にあらずとも酒杯を離すことのない方と思われる。でも、この句は神の留守に集うバツカスで絶妙の俳味が溢れている句で、いたく感銘した。私も含めてのバツカス連中、是非百薬の長の酒であり度い。カレンダーもあと一枚、十二月を残して今年も終る。ちなみに師走の句は

昔より聖者は瘦せて枯芭蕉

鷹羽狩行

の句である。

(H.23.11.24)

我孫子日記

11/18例会。11/23一葉忌、九段坂イタリヤ文化会館。11/25猿ガ京。11/30SOA。12/4青戸。12/6銀座。12/7放射線量測定。12/9両国。12/16例会。

原稿募集

句会報の中から一句一句選び鑑賞文を発行所まで、ハガキかメールにてお届けください。俳句特別作品は十句、

評論、エッセイなど、又は季語に纏わる生活逸事などを書いてお寄せ下さい。当分十六頁中綴し製本型で編集します。ので、先的要領にて原稿をお寄せ下さい。多ければストックして順次掲載します。

編集後記

我が畑の二回目の放射線量測定値は下の図のようでした。地上十センチの位置の値です。地面ではこれより大きくなりますが、皆0.3以下でした。ある屋敷内の雨垂れの在る地面や落葉の溜る位置で高い値が測定されました。場所により予断を許さぬということです。

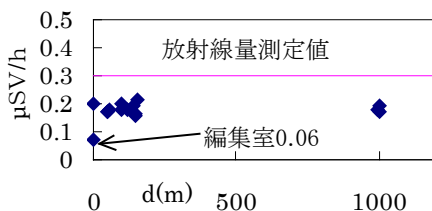
さて、今年はそういうことで、地震・原発事故による放射能汚染があり、憂鬱な気分そのまま暮れて行きます。しかしながら、俳句文芸は季節感を通して心の交流が出来ますので、青々とした青野を歩いている如き感慨があります。ともかくも、良きお年をお迎え下さいませ。来年も宜しくお願いいたします。

白金霞 第10号 平成二十二年十二月発行

編集・発行人 光成高志(FAA) 〇四・七一八七・一〇六八

発行所 T二七〇・二二一九 我孫子市南新木二二十四十七

表紙の題字・嘉悦主三。写真は白金霞



彰一英語俳句

My HAIKU

Deep frost.
laundry hung up all night
are hardening white

Teacher's correction

Deepest frost
laundry hung outside
hardens white

Teacher's comment

Yes, I quite enjoyed this one. Did you
see a similar version in the Asahi
Haikuist Network ? Bravo !